

2024 年 6 月 26 日 5 歳児公開保育研修会 ～保育を見よう・保育を語ろう～

子どももわたしたちも主体感をもち、互いに学び合う。
実践の場に身を置く中で、実践を見つめる「わたし」は
何を感じ考えているのか。

「かく」こと、「語る」こと、と他者の言葉を「きく」ことで
自身の実践において見出した意味を再構築していく。
今日ここでわたしたちが創り出した学びを大切に、
次の実践を創ることにつなげていくことを目指しました。

保育を参観する前に、この研修における前提を参加者のみなさんと
共有をしました。その後、参観者の皆さんには 5 歳児の保育実践を参観
いただきました。

保育後、当日の保育の実践者による D.D.を参加者のみなさんに参観し
ていただき、参観者の皆さんに保育を通して感じ考えたことをかいて
いただきました。

記録した保育をもとに小グループで語り合いを進め、自身の実践にお
ける価値観や教育観などを捉えていくことに臨みました。

また本研修による営みの意味を畿央大学 中村恵教授よりお話いた
されました。

研修終了後には、担任を囲み改めてその日の保育実践を振り返る時間
をもちました。

みなさんご参加ありがとうございました。

(参加者：中村 恵先生（畿央大学） 参観者 18 名 本園職員 8 名)

6月26日（水） 日程

9:00～9:15	研修のありかたについて
9:15～11:45	「保育をみよう」
12:00～12:15	「実践者の語り合い（D.D.）を見て聴こう」（希望者）
12:15～12:30	本園の研究について
12:30～12:45	「保育を書こう」
12:45～13:45	昼食
13:45～16:00	「保育を語りあおう」
13:45～14:45	本日の保育を通した語り合い
14:45～14:55	共有タイム
15:05～15:30	中村恵教授よりご助言
15:30～15:50	本日の研修における学びについてふりかえり
16:00	終了

今ここで「書く」ということ

- 何を「見た」のか
実践の場での自分のまなざし
無自覚な自分の価値判断・枠組み・教育観
- 変わらない意味 と 変わりゆく意味 を捉え続ける
→子どもの育ちや学びの捉えを可視化する
学び続ける実践者としての「学び」を可視化していく

残すための「保育記録」から 学びを創り出し、学びの痕跡となる「書く」営み

- 実践の場で「わたし」が何を感じ考えているのか

語り 書き記し 他者の言葉を聞く中で変容しうるもの

実践を見つめる立ち位置が変わることで
その実践の意味も変わる

→実践の場に主体としてある子どもの学びの痕跡であると同時に
同じく主体としてあるわたし自身の学びの痕跡となり得る

「保育をかこう」



「保育をかく」こと

[illegible]

と書く」

(氏名)

本人の「当たり前」が、問、直される瞬間、なぜ大切になっているのか、一

あざのせい

① なぜ「その場にいる」ことを大切になっているのか
意味は共有するが、たとえていたが...
→ その場にいることが「思っている」、思っていた
個別的な態度、必要とするものにもなる
その場にいる、在る、ということがコミュニケーションを構成している
一作用している。空間が主体として空間の中で組みあがっている

② 年長と「話しかけ」「聞かせる」、なにをやるかのタイムスケジュール
つかむ、そこからできるものではない
・ 2時間分の蓄積、一「話しかけ」「聞かせる」「聞かせる」
大切にしている立場
私はいくらコミュニケーションも
漠然とコミュニケーションでよしと
されてきた価値観がある
「ふん」はなにか大抵にしているが、
問、聞かせるに傾いている。

(氏名)

手元の「当たり前」が、^が瞬間、直される瞬間、なぜ大切になっているのか。

あさのけい

① なぜ「その場にいる」ことを大切に行っているのか
意味は共有する目的、だと思っていたが...
→ その場にはいることが 見逃しにくい、と思っていた
個別の「度」が必要なものではないかと
その場にいる、在る、というところがコミュニティを構築している
一作用している。互いの主体として空間の中で組みあがっている

② 年長と「話し合う」「聞かせる」、なにをそのタイムにエ
つかむ、ここができればいいのかな
・ 2時間分の蓄積 → 「話し合」「聞かせる」は「聞かす」
大切にしている立場

・ コミュニティそれぞれそれぞれ「よく」
出てきたからこそ、そのタイムにエで、関係性を
蓄積させて、表現させて

同時に話しているが、
「おそなえ」の大切
になるか確認

私は国語のコミュニケーション員
漢字とコミュニケーションがよいと
されてきた面価値がある。
「ふん」はなかなか出てこないが、
聞かされた機であつた。

研修設計を振り返って

保育実践を見る、語る、書くことの一つ一つが切り取られるのではなく、循環していくことを感じられるように、保育実践の参観と対話の機会と共に記録を書くことを行いました。

保育実践を参観する時、その視点は多様であることから、記録にはそれぞれがもつ背景を踏まえながら、その人自身の興味関心が反映され、保育実践の切り取り方には、自身の価値観が見えてくるのではないかと考えての研修でした。

研修で書いてみると、私達が想定していたよりも皆さん多くの文章を書いてくださっていました。書きたくてたまらない、と思ってくださった方もいたのかもしれませんが。

研修で書かれたものは、保育メモとも違いました。自分だけの省察は、解説的に「書く」ことはしないかもしれない、とも感じます。保育の解説の言葉が多く文章の中に書かれていました。「書く」という時に他者に分かるように書かねばならないと感じた人もおり、そのため文章の量が増えたことも考えられました。

また保育を書いた後、書いてみた後に気づいたり感じたりしたこともあったという振り返りから、書いてみてどうだったかを問う時間をとってもいいのではないかと感じています。

参加いただいた方のふりかえり（抜粋）

「違う環境で学ぶ大切さ」

いつもと同じではなく、ぜんぜん違う環境から
違いや学び、見え方が変わると感じた。

保育者も構成員の一人としてじぶんの思いをもつことが、子どもを尊重することにつながると学んだ。

「書く」ことで自分の視点がよく分かった。
様々な人と対話をするこ
とで、いろいろな視点で
話ができる。

本研修を通して感じ考えたこと

正解のない保育 価値観を捉える 書くこと・振り返ることを通して

公開保育研修会では、グループ内の対話では今日の保育の子ども達の姿と教師の間わりを中心に話題が展開していた。グループ内の対話で今日の保育のことを言葉にしていくにつれ、なんだか私の言葉が今日の保育の正解になっているような感じがしていく。今日の資料には、今日までの姿に意味づけをしている資料もある。私ならの今日までの子ども達の捉えであり、また時間をおいてみることもあさうか、と思うところもあり、違ったかな…ともやもやすることもある。書かれていることはどれも「今」である。しかし、その時の私達のあり方で捉えも変わっていくのだと感じている。正解と決まったものではないけれど、言葉にして伝えることで正解のように感じてしまうのはなぜだろう。対話をする上で「知っておくこと」は対話を深めるのだろうか。実践した私の視点だけではなく、参加者も公開保育を見て、書いて、語ってその中でそれぞれに循環していくことを感じてもらうことも公開保育研修として重要の意味の一つに感じている。

そんなことを考えていた時、公開保育研修会の1週間ほど前、子ども達との話の中で時間が経つと夜は暗くなっていくという気づきを聞いたことを思い出した。その日の記録には「当たり前だよ」と友達への気づきについて発する姿にもややもとする私の姿が雪かかれていた。今思えば「気づき」と感じた人と「当たり前」と感じた人、どちらも同じもののみて感じたことであり、書いたり、話したりすることで、それぞれの価値観から言葉となってきていたのだろう。

公開保育研修会も同じなのかもしれない。お尋ねされることはあるが、そこには私も含め、参加者それぞれが価値観を捉えてこうとするプロセスのさなかにグループ対話の時間があったのかも知れない。そしてそれは、対話の時間を超えてふと思い返したり、胸に落ちたり、もやもやになったり変わりゆくものであるのだと思う感じている。

